

永遠の師父

前川 忠 夫

私は今、先生がご健在であつた昨年四月十一日、首相官邸に六十五年の国体誘致についてお願いにうかがつたときのことをしみじみと思い浮かべております。私が「十年後のお願いにまいました」と申し上げると、「十年先か、知事も僕もそのころは生きとらんじやろうのう」とユーモアたっぷり申され、思わず「いや、私はそうかも知れませんが、総理は大丈夫です」とお答えして居並ぶ者、大笑いたしました。それが二月月後に、ほんとうになるうとは……。私にとって、先生にお目にかかった、これが最後の日となつたのです。

思えば、私が初めて先生にお目にかつたのも首相官邸でした。二十年ほど前のことになりましたが、先生が池田内閣の官房長官をしておられたころです。香川大学の大泉学長のお供をして、大学のいろいろな問題のお願いに官邸におうかがいしたのです。そのときの第一印象は、たいへん謙虚な人間味あふれるお人柄であられると思ひました。この第一印象は、その後お目にかかるたびにますます高まり、尊敬の念をいっそう深くしました。

また、先生が、「柳は緑、花は紅」とか「エターナル・ナウ」という言葉を平素愛誦されておられるのを知つたとき、たまたま私の好きな言葉と同じでありましたので、その偶然の一致に驚き感激いたしました。

先生と私とは、同じ三豊郡の農家に生まれ、同じ少年時代を過ごしました。また、当時の学生は内村鑑三とか新渡戸稲造、矢内原忠雄などの諸先生方の著書を愛読する時代でした。このように、少年、学生時代を通じて同じ世代を体験したことで、どこか相通するものがあつたのかもしれない。

私が先生にお目にかかれた回数は決して多くはありません。しかし、常に先生が身近に感じられましたのは、お生まれになったところが同郷というばかりではないと思います。先生の優れたお人柄とでも申しましようか、温かく奥行の深い人間性によってであったと思います。あのやさしい笑顔には、いつも人に対する思いやりの心が溢れておりました。細かな心くばり、控え目なお振舞い、人間大平先生の魅力は実に計り知れないものがありました。

また、政治家としても、政治の原点である「人間の尊厳」を理念に、寛容と忍耐に徹して、不毛の対立をさげ、信頼と合意を政治姿勢とされました。そして、「生きがい」とか「思いやり」といったことを政治の前面に持ち出されたのは、歴代首相のなかでも先生お一人ではなかったでしょうか。

こうした先生の政治姿勢のなから「田園都市国家構想」が生まれたのだと思います。そして、この構想を打ち出された先生の脳裏には、先生の愛してやまなかつた郷土香川のたたずまいが在ったことでありましよう。

私も、先生が唱えられたこの構想に全く同感であり、直ちに県政の基本指針として、とりあげさせていたいただきました。

今後とも先生のご遺志を体して、百万県民とともに、「田園都市香川」の建設に向けて、全力をあげたいと考えております。

今、香川県民は、仰ぎ見て師とし、父とすべきその人を失いました。しかしながら、私たちは、いつまでも、先生を郷土の誇りとし、そのご高德とご功績を語り継いでまいりたいと存じます。

ここに先生の在りし日を偲ぶとともに、ご厚誼の数々に思いを致し、惜別の情をさらに深くする次第であります。

(香川県知事)